

家庭・防疫薬の重要性と社会人教育

大阪青山大学健康科学部 安部八洲男

1. 家庭・防疫薬の重要性

私たちの身の回りには、病気を媒介する衛生害虫(ハエ、蚊、シラミなど)、病気にはならないが皮膚炎やアレルギーを起こす有害害虫(ハチ、ドクガ、ムカデなど)、人々を不愉快にする不快害虫(毛虫、カメムシ、ヤスデなど)、また、家屋、家財、文化財、衣服などに被害を及ぼす経済害虫(シロアリ、キクイムシ、衣蛾など)など多くの害虫がいる。人々の生活環境が都市化して、衛生状態が良くなれば、これらの害虫類による被害は、減少すると期待されるが、実際は害虫問題は減らない。それは、人々が都市に集まり、ビルを建て、地下街を作り、冷暖房を完備するなど、人間にとって快適な空間を人工的に作り上げた結果、害虫にとっても快適な空間を作り出し、繁殖に適した環境を提供していることになるからである。つまり、都市化は新たな害虫問題を生み出すのである。

更に、人々の害虫に対する過敏性や衛生意識の高まり、冷暖房完備や家屋の密閉性向上などの生活様式の変化、海外との人や物の交流の増加、夏季の高温多湿と気温の上昇などにより、害虫と考えられる昆虫類も変化し、多様化していく(害虫の多様化)。また、一時は、ほとんど被害が無くなっていた害虫が、何らかの理由で再び勢力を盛り返した害虫(再興害虫:シラミ、トコジラミ)、更には、日本には居なかった害虫が人や物に紛れて日本に侵入した害虫(外来害虫:セアカゴケグモ、アルゼンチンアリ)などが、これに加わる。

この世に人間がいる限り、害虫は無くならない。なぜなら、害虫類は人間が作り出し、人間が広げているものだからである。それ故、家庭・防疫薬の重要性および害虫防除の重要性は今後も続くと考えられる。

2. 知の市場共催講座「防疫薬総合管理」の意義

知の市場の共催講座として、「防疫薬総合管理」—身近な生活・環境害虫防除—という講座を開講している。この講座の水準は「中級」とされ、主として、この分野で活動している社会人の教育を目的としている。日本の大学で、「農薬学」の講義を行っているところは、それなりにあろうが、「防疫薬」に特化した講義を15回もやっている大学はないと思われる。従って、社会に出て、家庭・防疫薬の研究、開発、販売などの仕事に従事されている人たちは、大学を卒業後に、社会に出て自学自習しなければならない。この社会人の自学自習をサポートする意味で、われわれが提供している「防疫薬総合管理」の講座の意義は大きいと考えられる。